


多賀「里の駅」の実験と、世界遺産への取り組み

NPO 法人彦根景観フォーラムは、2004年8月に認可され、今年で8年目を迎えます。そこで、2回にわたりその使命や活動のあゆみを振り返ってきました。3回目は、多賀里の駅と世界遺産への取り組みなどについて考えてみます。

多賀「里の駅」一圓屋敷の実験

2008年6月、彦根景観フォーラムは、多賀町にある大庄屋「一圓屋敷」の寄贈を受けました。

一圓屋敷は、安政4年(1858年)に建てられ明治24年に瓦葺きに改修された古民家で、毎年
維持管理と定期的な改修が必要です。そのため、NPOらしい事業の展開で改修費を捻出する方法を創りだすことが課題でした。

そこで、9月に多賀の有志の皆さんでつくる「多賀クラブ」と共同して「多賀「里の駅」」を立ち上げ、第1回多賀「里の駅」シンポジウムを開催。一圓屋敷の価値を正しく評価し活用すること、都市住民に里山体験の場を提供し交流を促進して「むらおこし」の起点とすることなどが提案されました。



一方で、法的規制を含む5つの課題があり、3年間は実験として「里の集い」による人材発掘、野鳥の森観察会、ソバ打ち体験、地元料理試食会、野菜市による都市住民との体験交流と農家レストランの準備などに挑戦することとしました。

「里の集い」は、毎月第1土曜日にゲストを呼んで開催され、39回を数えています。同時開催の地元料理試食会ではメニュー開発がすすみ、農



家レストラン開設に向けての試行が始まっています。その他の事業も多賀クラブの皆さんの力で継続しています。しかし、3年がたち、新たな課題も生まれており、体制面や経営面から再検討が必要になっています。



一圓屋敷の活用では、建物観察会、絵葉書や調度品の紹介、「一圓屋敷屏風展」「古の道具展」などが開催され、価値が広く認識されてきており、今後はどう修復して公開していくかが問われています。

世界遺産をめざして

彦根景観シンポジウム

日仏景観会議・彦根会議「5つの未来に向けた宣言」では「世界遺産にふさわしい彦根都市ビジョンの作成と実現」を掲げており、彦根景観フォーラムは当初から世界遺産を一つの目標として取り組んできました。

2005年2月の彦根景観シンポジウムでは「世界遺産登録に向けた鎌倉の活動に学ぶ」をテーマに、近世城下町遺産の保全と活用に向けて市民・行政・大学の連携による調査研究、制度構築、まちづくり活動、啓発運動を呼びかけました。

その後も、「世界の城下町彦根をめざして」(2006年)、「世界遺産をめざす彦根の課題」(2007年)、「石見銀山に学ぶ世界遺産」(2009年)と彦根景観シンポジウムで啓発に努めました。

2008年2月の彦根市世界遺産懇話会報告では、世界遺産の構成資産として「城」に「城下町」を加え、調査研究と普遍的価値の証明に取り組むとされました。さらに、2009年の歴史まちづくり計画では、世界遺産懇



話会のゾーン計画と重なった地域の整備が10年間で進められることとなり、世界遺産登録に向けた機運が熟しつつあります。しかし、石見銀山のような市民や事業者と行政、大学が参加する協働会議は立ち上がっておらず、今後の大きな課題です。



彦根景観シンポジウム2010は「芹橋のまちづくりを考える―路地を活かした歴史的まちなみの保全再生」

をテーマに、世界遺産の構成資産にふさわしい、路地を活かしたまちづくりを、建築、交通、防災の面から具体的に考える内容となりました。

まちづくり広報活動

彦根景観フォーラムは、2005年7月に、まちづくり情報誌「きらっと彦根」を創刊し、年4回の発行を続け、現在27号となっています。このほかに、2006年に市販の単行本「彦根歴史散歩―過去から未来をつむぐー」を発行、小冊子では、「世界の城下町彦根をめざして」(2006年)、「町屋に住む―建築技術活用法」(2006年)、「100年前に描かれた彦根―イギリス人水彩画家アルフレッド・パーソンズ」(2007年)などあわせて5冊を発行しています。(終)



レポート&お知らせ

●【足軽辻番所サロン・芹橋生活26】



12月18日(日)
10:00~11:30 太田邸

「足軽組の組織と掟」

母利 美和(彦根景観フォーラム理事・京都女子大学教授)

市民のトラスト運動によって解体をまぬがれ、現在は市によって解体修理中の辻番所。江戸時代にその辻番所を有していた芹橋12丁目の鉄砲40人組のルールブック「御組(おんくみ)歴代(れきだい)規矩(きく)留帳(とめちょう)」が母利先生によって紹介された。

それによると、藩から配属された2名の手代が人事や道具管理などの官僚的事務を行なう一方で、足軽が10人一組の「小屋」をつくり、各一組に2人の「小屋頭」をおき、計8名の小屋頭の中から一人が「年番小屋頭」を務めて、矢場での射撃訓練や辻番所の運営・小修繕などの業務を統括したことがわかった。

さらに、この自治組織は、足軽間の業務負担の均等化、矢場や辻番所に土地を提供した足軽に広さに応じて年貢を分配すること、困窮した組中の足軽を相互に扶助すること、香典の額などを決めて実行していた。

辻番所は、平時は「御普請出人衆の番所」であり、火事や出水の時は小屋頭の4人が辻番所に残って警戒



し、他の4人が鉄砲組全体を率いて出動する。備える道具は、寄棒2本・薬研2舟・石臼・皿桶・石持棒・大綱1・紐綱1・虎皮(こひ)1さき、夏は蚊帳1張、提灯1張などと決められていた。辻番所は、これまで城下町警護の見張り場とされてきたが、自警のための夜回りの順番を張り出すなど自治組織の運営面から新しい光が当てられた。(堀部)

○次回【足軽辻番所サロン・芹橋生活27】

2月19日(日) 10:00~11:30 太田邸

「辻番所修復の概要と完成後の利用」(仮題)

彦根市文化財課(予定)

●【それぞれの彦根物語87】



12月17日(土)

10:30~12:00 寺子屋力石

「昭和30年代の彦根と湖東」

野村しづかず(滋賀民俗学会理事)

昭和30年代の10年間に起こった生活や農業・漁業の大きな変革を、貴重な写真をもとに語られ、今という時代を照らし出された。

○次回【それぞれの彦根物語88】

2月18日(土) 10:30~12:00 寺子屋力石

「高野道をゆく―彦根藩主の永源寺参詣をめぐって」

門脇 正人(愛荘町歴史文化博物館顧問)

●【多賀「里の駅」野菜市&集い39】

1月7日(土) 10:30~12:00 一圓屋敷

「近江路を歩いた人々」江竜 喜之(元長浜城歴史博物館館長): 試食会 餅入り七草粥